

【与那原】太平洋戦争中、強制連行された朝鮮人の軍夫や慰安婦の実態を記録したドキュメンタリー映画「アリランのうた」沖縄からの証言の完成が間近だ。監督の朴壽南（パク・スナム）さん（五五）らスタッフが十九日から二十五日までの間、県内での最終撮影に入った。二十七日クランク・アップの予定。七月には全国にまきかけ県内で上映される。

（91.3.20、沖縄タイムス）

慶良間島中心にロケ

強制連行 朝鮮人 慰安婦などの実態記録

京でロケ、二十七日クランク・アップ。その後、編集作業に入り約一時間四十分の映画にする。県内では八月八日新報ホール、九日沖縄市民会館で上映される予定。

朴さんは「完成して終わり、というのではない。これがスタートです。県や国も朝鮮人の強制連行の実態や死者数の調査を実施して補償問題に取り組んでほしい」と訴えた。

映画は三年前から取材・撮影を始めた。県内では慶良間島を中心に離島でロケ

を行い、数々の新証言を収録。証言者は沖縄戦に連行された韓国人元軍夫や在韓

被爆者ら約五十人に及び、撮影したフィルムは八万フ

ィートに達する、という。朴さんは「沖縄の沈黙は非常に重い。が、今まで沈黙していた人が少しずつ心を開き、沖縄戦のもう一つの面を語り始めた。これがきっかけになってほしい」と話す。

今回は糸満市や読谷村、名護市などでロケを行う。糸満市ではひめゆりの塔周辺を、読谷村では、朝鮮人軍夫に造らせた壕（ごう）などを回る。

朴さんらスタッフは十九日、与那原町の大城盛俊さん（五五）を訪ね、証言を収録。大城さんが大戦中、隠れていた玉城村内の壕の近くでロケを行った。大城さんは「壕には十八、十九歳の朝鮮の女性が六、七人いて、兵隊たちのおもちゃにされた。まったく恥ずかしい怒りをおぼえる」と語った。

スタッフは二十六日に東大城さんの証言をもとにロケを進める朴監督は「玉城村



「アリランのうた」 県内で最終撮影